

ホトトギス

八月号

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別取扱承認証第六二七号
平成二十二年八月一日発行 第四十回巻第八号



俳句随想 〔三百五十〕

汀子

東日本大震災の余震は少し収束してきたように思うが、原発に関してはまだまだ本当の状態が我々には余り知らされていない様で、その渦中にある福島県の方々は二重三重の災害に耐えなければならぬという苛酷な状態に翻弄されておられ、一日も早い収束を祈るばかりである。地震、津波、原発の災害の中で投句された方々の生の句には胸が詰まる。

俳句を作ることによって少しは心の余裕を取り戻して頂きたいと願うばかりである。

さて、この所の季題の使い方少し触れたいと思う。例えば「霞」という季題を「春霞」と五文字にしている。「耕」を「春耕」とする。「霞」だけで春の季題であり「耕」だけで春を表す。「麗か」を「春うらら」とする。俳句は短い詩であり、わざわざ春を入れないで季題を表すのが大事である。朝日俳壇で議論をした。「代田」は季題になっているが、「水田」は季題ではない。「代田」とすればいいのであるが、案の定、金子氏が突っかかってきた。「水田」も「代田」も同じなのに季語で無いのはけしからんと言う。「水田」に季節感が出るような名句があれば季題となるかも知れないがそれは「代田」と使えばいいのであると言ったが納得されなかった。季題論争は時々することも大事かも知れない。

旬日記 汀子

平成二十二年八月一日 東海ホトギス俳句大会

汗の歸路力残して置くことも
露涼し今日のはじまる朝の芝
すんなりと決まりしことも汗涼し

八月二日 ロイヤル俳壇

旅疲れとも寝冷とも家居かな
ばさと音静寂破りぬ桐一葉
シャンデリア揺れて華やぐ晩夏かな
旅終へてくつろぐ晩夏シャンデリア

八月三日 「貂」 八三句

新涼 や 一 句 存 問 仕 る

みよし野の露踏み分けて問ふことも
露けしと思ひし日々をなつかしく

八月八日 下萌句会

夕風の立つや木樨の花零す
返信を忘れてならぬ文月かな
巡り来る予定次々文月尽
さういへば新涼の風なりしかな
人数の今日切るべしと西瓜かな

八月十日 大阪クラブ

間に合はぬ花火の夜と知りながら
渋滞の先頭遠し揚花火
スケジュール通りにいかぬ花火の夜
初秋と言葉に出して諾ひぬ
次のことその次のこと法師蟬

新涼といへさうな朝旅立ちぬ

八月十日 綿葉倶楽部

何となく氣力の支へゐる残暑
満ちゆけば盆の月とて仰がるる

八月十二日 清交社

山荘にのこるの頃なりしかと
きざはしの先に新涼ありしこと
寝過ごしてもう新涼といへざりし
新涼の大樹の影を抜ける道
台風の空のつづきの遠ざかる

八月十二日 「寒害」 創刊七十年

忘れられざる一と言を爽やかに
野菊咲く山路に杖を曳かれしや
峰かけて吹き渡る風野菊叢

八月十七日 有恒倶楽部

秋めくといへば氣配のありにけり
天の川三瓶の旅を彩れり
満天の星従へり天の川
酔芙蓉花の命に従へり
きざはしを上り秋めく風纏ふ

八月十七日 無名会

洗ひたる硯乾く間なかりけり
残暑とていとふ外出となりしこと
朝顔の午後になかりし命かな
朝顔に開かざる木戸となることも
露けしや仕事の山を崩しつ
朝顔や又庭師来てくれしこと
書き終へて忽ち硯洗ひけり

八月十八日 夏潮句会

水音を止めて修理や池の秋
玻璃越に見る限り庭秋めきぬ
はや六十五年の折り終戦日
きざはしを上れば会へる秋の風
俯瞰して庭の残暑を遠ざくる

八月二十一日 東北ホトギス俳句大会前日句会

東京の残暑を置いて旅立ちぬ
出来てゆく空の变幻歸雲
みちのくの秋は空から降りて来し

八月二十一日 東北ホトギス俳句大会

半世紀経し干拓の豊の秋
見渡すといふ焦点の露けしや
案内の秋田ことばと秋の旅

八月二十七日 時雨会

雨を待つ心も少し初嵐
滞在の短き夕べ初嵐
朝顔の萎えて仕事のはかどりぬ
紫も白も朝顔今日どの色
墓参する日に丸入れて予定くむ
羨しともハワイの旅の星月夜

八月二十八日 北信越ホトギス俳句大会前日句会

信州の残暑といへどあなどれず
秋風や川中島と聞くばかり
山国の新涼を恋ひ来たりけり
もう少し露に濡れつつ偲びつつ
虚子恋うて露の干ぬ間の散歩道
えにしとは露の邂逅なる小諸

八月二十九日 北信越ホトギス俳句大会

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十二年八月一日 東海ホトギス俳句大会

繩緩ぶより疲鶉となりゆけり
引き分けといふナイターに疲れけり

八月二日 はせを句会

魂を宿し鶉繩の伸びゆけり
十二代城主の遺影蟬時雨
忘れ物めく疲鶉でありにけり
荒鶉どち水ばらばらにしてをりぬ

八月三日 大倉源次郎氏DVD「五体風姿」ライナーノート

言の葉に松の涼しく和してをり
源平の古語る露涼し
雲の峰天女の舞ををさめけり
虹立ちて天鼓響ける現かな
冷酒に衆生の静寂ありにけり
一笛を涼の泉の湧きにけり
仇討を涼しく語る鼓かな
艶やかといふ柳ありて女郎花
言霊を招き山開となりぬ

八月五日 蕉心会

下町に片陰探すとは至難
炎天に地球の自転止まりさう
油照関西弁を聞けばなほ
こんな日に涼しいなんて詠みますか
炎天に一步踏み出すまでの笑み
やつと汗引いて表に出れば汗
さう言へば片陰少しいけるかも
炎天下煙草吸ふのもためらひて

みちのくの金魚の話題持て佳人

八月七日 虚子記念文学館投句

秋立つや特別展の馴染む館

八月八日 野分会音屋例会

稲妻の走り淋しき闇となる
門火焚く衆生を少し遠ざけて
門火焚く衆生を少し遠ざけて

八月九日 朝日カルチャー若草句会

何かある線香花火果てし闊
霊柩に悌の又新しく
手花火や夜を欺く謀
手花火に都会の夜は明る過ぎ
帰り来よ帰り来よ君霊柩に

八月十日 土筆会

神田川新涼少し吐き出せり
秋の蟬名園といふ音色かな
その中の一つは地球星月夜

八月十五日 野分会東京例会

小さく燃ゆ平家の里の門火かな
悌を引き寄せてゐる稲光

八月十七日 草木瓜会

一雨に秋めく風の生れけり
梨売の声に稲城野開けゆく
三沢川秋めく音色ありにけり

柔らかに多摩の稜線秋めける
太陽の輪郭茫と秋めける

稲城野に梨の気品を買ひにけり

八月十七日 悼 野村豊子様

送火や思ひがけなき人の訃に

八月十九日 登高会

くらくらとくらくらと残暑かな

走馬灯揺れてあの人還りゆく

八月二十二日 東北ホトギス俳句大会

祈りの手十字を切りてより残暑

鱗雲大瀧小さく見下ろして
大瀧の風新涼を少し抱き
秋灯下和太鼓一糸乱れずに
秋めくや回る展望台の視野
あ霧にこの風にみちのくを知る

八月二十四日 若水句会

新豆腐色濃き方を買ひにけり
語部は終戦の日の母心
秋めくやワインを少し重口に
たかが豆腐されど神戸の新豆腐
新たな終戦の日の出会ひかな
喫煙所紫煙秋めく風に溶け

八月二十五日 目黒学園句会

秋めくといふ言の葉の虚ろかな

八月二十五日 目黒学園句会

蓼の花秋田小諸を繋ぐ旅

桜蓼見つけて稜線の歩の軽し

稲妻や山の稜線削るかに

稲光天使のネオンサインかな

ラテン語の文字黒々と墓洗ふ

八月二十八日 北信越ホトギス俳句大会

どちらかといふと武田派秋暑し

山見えてより信濃てふ新涼に

ナイターはしばし忘れて大会へ

虚子詠みし小諸露けく語らるる

木遣てふ灯下親しきアルトかな

八月三十一日 夢三三全国俳句大会前日句会

稜線を統べ新涼の風となる
動かざる山新涼の動き初む

雑詠

廣太郎 選

降ろされし凧の大きさありにけり 徳島 岩田公次
 先づ眉山消えし黄沙の徳島市 同
 母が雛飾つてしまひたる不満 同
 二分咲きの花と見上げし佳き集ひ たつの 浅井青陽子
 花衣とはおほげさな普段着で 同
 いのちあるさくらの古木咲きそめし 同
 雛右手をかまへ鼓の無き弓手 福山 竹下陶子
 芝を焼く太陽もまた燃えてをり 同
 蟻穴を出て人間の世のありぬ 同
 入学の採寸の凸凹の列 神戸 立村霜衣
 また帽子かぶり直して入学児 同
 たんぼゝの蒲公英のたんぼゝの野辺 同
 壊滅と聞く悲しさに冴返る 京都 安原 葉
 刻々の被災報道冴返る 同
 被災地の芽立ちも急かせたまへかし 同
 白梅のいろいろ紅梅のいろいろ 熱海 嶋田一歩
 散ることもちらほらとして梅の花 同
 腰掛けること人は出来梅の花 同

マジシャンの得意気な指春隣 渋川 木暮陶句郎
 体ごと振るフライパン春隣 同
 春隣心の窓は両開き 同
 山焼いて悼み心をもち歩く 熊本 岩岡中正
 春寒く人知及ばぬことばかり 同
 囀も靴音も絶え果てし町 同
 年ごとの花に老いゆくことも良し 東京 今井千鶴子
 お互ひに春愁を口には出さず 同
 焚かずある春の煖炉に椅子二脚 同
 今日よりも明日を信じて絵踏かな 徳島 多田まさ子
 転ぶとは悲しき言葉絵踏かな 同
 土をよけ土を被りて物芽出づ 同
 勝鶏は前へ前へと土煙 神戸 山田佳乃
 鶯の次の声まで静寂伸ぶ 同
 人の世を少し浄めて初音かな 同
 一頭のパンダに百の人うらら 奈良 古賀しづれ
 動くまで岩でありけり犀遅日 同
 青空の桜大地のフラミンゴ 同
 何気なく覗かれてゐる花筵 東京 橋本くに彦
 花の宴わらひ上戸の出来上がる 同
 名園の花と別れてまた花へ 同
 春光を弾かねば道開けざる 香川 湯川 雅
 藪椿数で埋めきれざる愁ひ 同
 漣と春光刻み合うてをり 同

雑詠句評（七月号より）

静 龍・とほ歩・葉
中 正・眞理子・千鶴子
むつみ・保 佳・美 奇
憲 明・廣太郎

春と手をつないで歩く女の子 東京 今井千鶴子

「春と手をつなぐ」と言う表現についていろいろと考えさせられ、最初は雲を掴む@お思いであった。結論は何物にも束縛されない自由で身軽な状態を表現したのであると言う思いにいきついた。

今まで外出時には防寒着や手袋をはめていたが、春めいて気温も上がり温かくなりコートも手袋も必要でなくなつた。全身身軽になり両手の指先にまで自由に外気をしっかり感じとつていゝる喜びであろう。大手を振つてスキップをしながら全身で暖かくなつた喜びを表現している子供をしっかりと観察された御句で「春

と手をつなぐ」と言う素敵な表現になつたのである。（静龍）
何とも可愛い女の子の姿が見て取れる。ひよつとして入学を控えた子供なのかも知れない。春の声を聞いて、うきうきした気分になつたのだろう。この「春」に限らず、夏、秋、冬という季節を詠むのは難しいが、見事にこの季節の雰囲気余すところなく捉えた名句が生れた。（廣太郎）

その内といふ約束も春隣 相模原 木村享史

春隣。日差しも、そよぐ風も、春はもうすぐそこまで来ている。さて、掲句。その内に○○しよう！あたたかくなつたら……と、言う様なことは、よく見聞きすることである。気心の知れた者同志であれば、なおさらのこと、待ち遠しい約束に違いない。

日常の、それも、極ありふれたことを、さらつと、詠みこむお手本であり、季題の春隣ならではの好句。（とほ歩）

それ程重要ではない約束、というのは概ねこんなものではないだろうか。特に関西人の大らかな会話はよく話題になるところではあるが、未だ春になる前の寒さが残っている時期、もうすぐ春になる、という期待もユニークに見て取れる句である。春になると、もつと確実な約束になるのだろう。（廣太郎）（以下略）

天地有情

花子選

点眼の一滴にある余寒かな
京都 稲畑廣太郎
手術室ドア開くより余寒かな
同
散つて来る花とは次が次がある
東京 薦 三郎
紺碧の空より流れ来るも花
同
目つむれば花刻々と咲く氣息
神戸 安原 葉
登り来し人等消えゆく花の雲
同
揖保川の花菜明りを楽しめり
熊本 浅井青陽子
虚子浮かび仏の浮かび花の下
同
葉隠れに確かに朴の咲く香かな
東京 稲岡 長
丹波路の五月の水路水走り
同
山よりの神水ゆたか春を呼ぶ
千葉 宮崎 正
説明の上手な主種物屋
同
看取られてゐて啓蟄のころあり
福山 井上浩一郎
隠れ里雪解の水音はじまれる
同
大地震ありたる夜半の朧月
神戸 今井千鶴子
天災を怖るるも花心もて
同
芳草のやうな便りのとどきけり
たつの 岩岡中正
草摘んでペンより重きもの知らず
同

水音のあはひにひそむ花の黙
榎原 長山あや
金剛の花の露おく葎かな
同
みよしのの心濡れゆく葎かな
奈良 河野美奇
雨上る雫の露ならむ
同
一城のこれより花の天下なる
吹田 古賀しづれ
お天守といふ朧世へ迷ひ込む
同
かはせみのまぼろしの彩飛びにけり
箕面 竹下陶子
鯉涼し錦を引きて沈みたる
同
うららかや休耕田に猿五匹
神戸 田村 元
柴又の帝釈天やわらび餅
同
津波禍をのがれし花の咲きはじむ
宝塚 嶋田一步
花下でまた泣く人の来て津波跡
同
春昼の目移りたのし菓子ビュッフエ
徳島 嶋田摩耶子
コーヒーのお代り自由窓に蝶
同
若州の竹紙なりし寒見舞
東京 後藤比奈夫
踏絵より悲し長崎殉教図
同
松明に心騒だつ修二会かな
相模原 内藤呈念
水取の法螺天平の声ならん
同

天地有情句評

汀子

虚子浮かび仏の浮かび花の下 たつの 浅井青陽子

虚子の面影の中に花に集まる親しい故人たち。

葉隠れに確かに朴の咲く香かな 榎原 稲岡 長

葉の台に隠れた朴の花も香が所在を告げる。

手術室ドア開くより余寒かな 東京 稲畑廣太郎

説明の上手な主種物屋 吹田 宮崎 正

季題が語る心の動き。

つい買わされてしまう花の種。

散つて来る花とは次がある 大阪 蔦 三郎

看取られてみて啓蟄のころあり 箕面 井上浩一郎

花吹雪にまみれて。

看取られながら春への意欲。

登り来し人等消えゆく花の雲 京都 安原 葉

大地震ありたる夜半の朧月 東京 今井千鶴子

花の山路。

三月十一日の東京の朧月。